生徒指導の機能を生かした学級経営の在り方

The state of the class management using the function of the student guidance

友枝　文也※

Fumiya Tomoeda※

１．はじめに

授業が成立しない学級、いわゆる「学級崩壊」の増加や「いじめ」、「不登校」といった問題行動等が社会問題となって久しいが、その背景や要因は様々であるものの、一日の大半を学校で過ごす児童生徒にとって学級の持つ意味は大きく、その学級を運営する学級担任の果たす役割は大きいものがあると考えられる。そもそも学校教育は、集団での活動や生活を基本とするものであり、学級や学校での児童生徒相互の人間関係の在り方は、その健全な成長との深いかかわりがあると言われている。一人一人が存在感を持ち、共感的な人間関係を育み、自己決定の場を持ち、自己実現を図ることができるような人間関係づくりは極めて重要であり、自他の個性を尊重し、相手の立場で考え、他者の良さを認めようと努める集団、互いに協力し、主体的により良い人間関係を形成しようとする集団づくりが求められることになる。

このように望ましい人間関係づくりとこれを基盤とした豊かな集団生活が営まれる学級の教育的環境を形成することは、生徒指導の目標の一つであり、担任一人一人が生徒指導の機能を生かした学級経営に取り組むことができれば、学校教育が抱える様々な重要な諸課題の解決に導く手がかりとなるものと思われる。

本論では、教科指導、道徳教育、学級活動に焦点を当て、生徒指導の機能を生かした望ましい学級経営の在り方や指導の方法について考察し、一つの方向性を示すこととした。

なお、論文作成にあたっては、小・中・高等学校に共通する内容が含まれるため、小学校、中学校での学級と高等学校でのホームルームを分けて表記する必要があるが、ここでは学級にホームルームが含まれていることを前提に、表記を学級に統一した。

２．生徒指導の機能

（1）　生徒指導の基本的な考え方

生徒指導とは、「児童生徒一人一人の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や能力・態度を育成し、将来において社会的に自己実現ができるような資質・態度を形成していくための指導・支援であり、すべての児童生徒を対象とし、すべての教職員がかかわりながら、学校教育活動全体を通して進めることで、自己指導能力を育成するものである。」とされている。

※日本経済大学経営学部経営学科

（２）　自己指導能力とは

自己指導能力とは、さまざまな日常生活の場面のなかで、何が問題なのかを発見し、主体的に考え、何が最も正しいことなのかを適切に判断し、行動し、結果に責任を持つことができる能力のことであり、自己指導能力を育む基盤として、第一に他者からの影響を受けて行動するのではなく、自己の思いや判断に基づいて行動し、他者への依存や責任転嫁をせず、自らの考えと責任において行動しようとする「自発性」が求められる。次に、自分の欲求や衝動に従った行為や行動が自身の本位とする結果にならない場合があっても自らを抑えたり、計画的に行動することを促したりできる「自律性」も重要となる。そして、教師や親、友人から示された計画などについて、与えられたことだけに従うのではなく、自己の中で意味づけや工夫を加え積極的に行動できる「自主性」が大切となる。このことにより主体性が培われ、自己指導能力が育まれる基盤となるものである。

（３）　生徒指導の機能とは

生徒指導は児童生徒の意欲や関心を高めたり引き出したりする機能をもち、各教科、道徳、総合的な学習の時間、特別活動など、教育活動のあらゆる場面において、すべての教師が、すべての児童生徒を対象に行うものである。

したがって、学校全体として指導の重点や方針を明確にするための生徒指導計画や組織をつくり、一人一人の教師が、いつどのような指導を行うかについて共通理解を図ることが大切となる。

また、生徒指導は広範囲にわたるものであり、全人格的なものであるから、教師自らが、積極的に研修会に参加したり、実践的な研究を積み重ねたりするなど、絶えず研究と修養に努めることが求められる。

これらを通じて、児童生徒の独自性や個別性を大切にし、一人一人が自己の存在感や有用感を実感できるように配慮し工夫することによって「自己存在感」を与え、児童生徒にとって人から認められ人の役に立つという体験となり、大きな自信を持ち、次なる積極的な行動につながることになる。また、教師と児童生徒及び児童生徒同士が互いに心を開き合い、互いに理解しあう人間関係に努めることで、「共感的な人間関係」が築かれ、自己受容が促進されるとともに、自他の理解が深まることが期待される。さらに、児童生徒が自ら判断し、決定し、実行するという活動や経験の場をできるだけ多く設定するとともに過程の努力を認め励ますなど、「自己決定の場」を与えることで、新たな課題に取り組む意欲を引き出す結果となる。

３．学級経営とは

（１）　学級経営の基本

児童生徒が有意義な学校生活を過ごすための教育活動の基本的な単位が学級であり、学級経営とは、「学級目標を達成するため、学習や生活の指導を中心として学級を意図的・計画的に組織し、効果的な教育指導を行う機能」とされている。そのねらいは、児童生徒一人一人の持つ資質や能力を充分に発揮させ、所属している学級集団の質を高め、発展させることにある。

また、学級は児童生徒にとって学校生活の拠点であり、望ましい仲間づくり・美しい教室環境・明るい雰囲気づくりを通して、諸活動に適応していく資質が育まれるとともに、学級集団への所属意識が高まり、集団としてのまとまりがもたらされることになる。したがって、学級担任として一人一人の児童生徒の個性を尊重し、学級経営上のさまざまな創意や工夫を怠ることなく、学級集団づくりに努めることが必要である。

（2） 学級経営づくり

学級にかかわるすべての教育活動が学級経営であり、日常のことから行事に至るまで、人間的なふれあいを基本に指導していくことが肝要である。担任と学級のかかわりは、校種や学校規模、各学校の特色等によって異なるものの、校種の特徴や児童生徒の発達段階を考慮して、集団として課題を解決しながら、相互の啓発を通して人間性を高めていくことが大切となる。

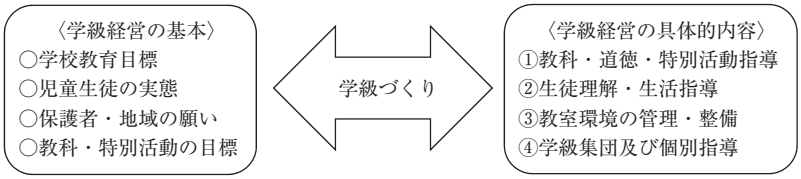

図１

（3） 学級経営の進め方

ア　学級目標の設定

学級目標は、学校の教育目標及び学年目標などの一般的・理念的な目標を基に、児童生徒の発達段階に配慮しつつ、学級の実態や状況に応じた内容にするとともに保護者や地域の願い等を考慮した具体的、実践的な目標を設定する。

特に学級担任としては、学級目標が学級集団において共通理解が得られ、組織としての活動へとつながるために、学級集団をどう創り上げていくのか、一人一人の希望や願いをかなえるために何が必要なのかなど、基本的なことを整理しておくことが必要となる。

イ　学級経営方針の作成

学級を経営するに当たっては、望ましい集団づくりに必要な共通のルールや活動内容など、児童生徒の活動すべてにかかわる基本的な事柄について、学級担任の意思とともに児童生徒の考えや主張も取り入れ、明確にしておくことが望まれる。学級目標とは違い日常生活に密接に関係する具体的に行動を求める内容が中心となるものである。例として［図２］で示すとおりである。

なお、学級経営方針は、一度作成したら変更なしではなく、児童生徒の状況に合わせた弾力的な経営方針であることも必要で、学級の足跡が刻まれるよう日々の実践に対する評価を継続的に行うことが望まれる。

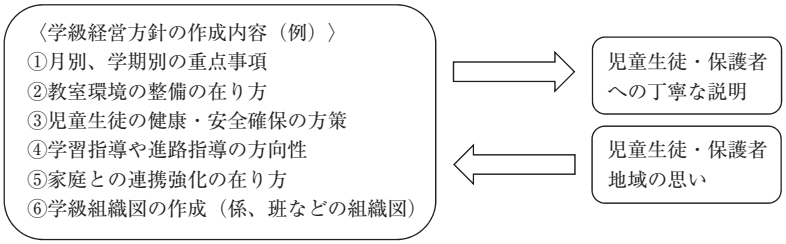

図２

ウ　保護者や地域との連携

学校経営とともに学習活動を充実させるためには、保護者や地域の信頼を得ることが必要であり、特に学校の考えを伝えることに終始し、学校の行事のみ参加を呼びかけるのではなく、保護者や地域の立場を認識し、様々な意見や考えを教育活動に取り入れるとともに教職員・担任として、地域の行事などに積極的に参加するなど、相互理解が深まるための行動を心がける必要がある。

（４）　学級組織づくり

ア　意欲が育まれる学級組織

組織とは、集団内における役割分担であり、学級が集団として動くためには、児童徒一人一人の個性や特徴を生かした役割を持たせることによって、学級の組織活動は生き生きとしてくる。特に毎日の生活を維持する上での仕事や集団の生活向上のための活動などを明確にしておくことが必要であり、学級の組織を編成する際には、児童生徒相互の人間関係や要望などを受け入れるなど、教育的な配慮が大切となる。

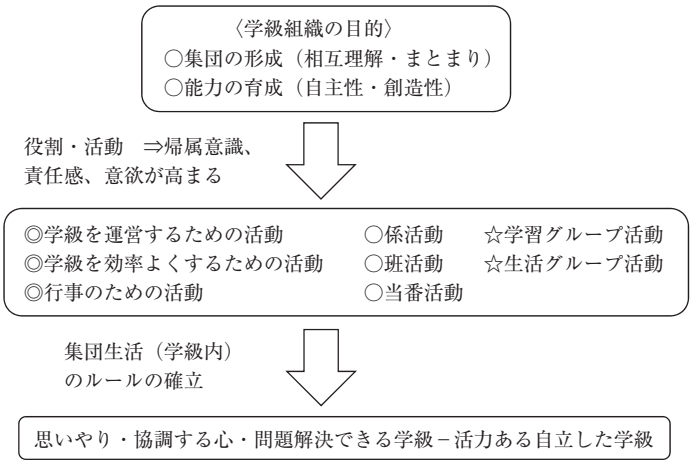

図３

イ　学級集団の育成、向上

学級への帰属意識や与えられた役割への責任から自己の存在感を持たせ、集団としての高まりが出てくるよう小集団の編成が望ましいと思われる、また、様々な活動に対する評価を行うことで、評価を受けた当人のみならず、他者へ刺激を与え意欲を引き出すきっかけともなり、学級集団として活性化しエネルギーに満ちた組織となり得るものである。

（5）　教室環境づくり

学級担任は、掲示物や席順を変えるなど些細な工夫で学級の雰囲気は異なってくるため、教室に温かさや優しさ、和かさを加え、啓発的な教育環境づくりに努めなければならない。特に次の２点について教室の環境づくりを進めることが必要である。

ア　創意ある教室

学習や生活など過ごしやすい雰囲気づくりや日常の整理整頓を含め、継続した教室環境の維持・管理に目を向け、整備されたものとすること。

イ　健康で安全な教室

教室内の施設・設備は、児童生徒の健康・安全に密接にかかわりがあるため、机・椅子の調整や採光、電気設備など全般的に注意を払うことが求められる。

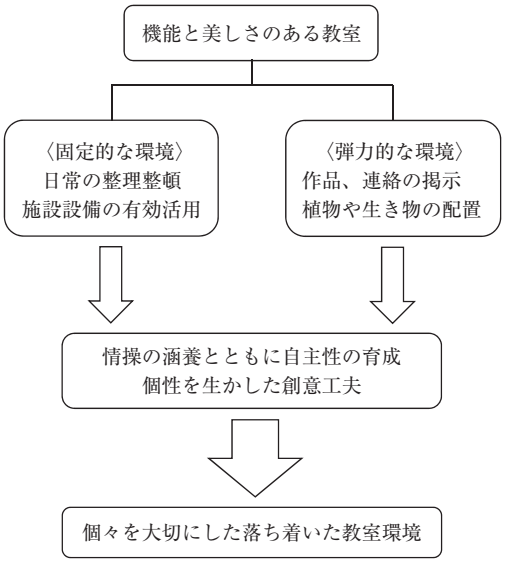

図４

（6）　学級事務

学級事務は、年度当初における人事異動、入学式、始業式とともに年度末における年間成績処理、卒業式、終業式、人事異動など、一般的に多忙な時期に集中する内容が多いため、正確かつ迅速に処理することが要求される。以下は表簿に関する学級担任の事務の主たるものである。

ア　年度当初に行う必要がある学級事務

- 在籍児童生徒の確認
- 家庭環境調査と資料の収集
- 個人調査と資料の収集
- 指導要録の作成整備
- 指導要録抄本の確認
- 出席簿の作成
- 健康診断票の整備
- 時間割の作成と確認
- 教科書、副読本の確認
- 教室環境整備（座席、靴箱、ロッカー、採光、換気等）

イ　定期的に行う必要がある学級事務

- 出席簿の整理統計
- 家庭訪問の計画実施
- 成績表、通知票の作成
- 施設設備の安全点検

ウ　随時行う必要がある学級事務

- 健康診断事後処理
- 転出入等の手続き
- 備品管理、会計事務
- 教室環境の整備

エ　年度末に行う必要がある学級事務

- 指導要録の整理
- 成績一覧表、関連資料の整理
- 諸公簿の整理
- 進路指導事務
- 備品整理、諸会計の報告
- 次年度への引継事項の確認

４．生徒指導の機能を生かした学級経営

（１）　学級担任が行う教科指導

ア　教科指導における生徒指導の意義

学校生活の中心は授業であり、児童生徒一人一人に楽しくわかる授業を実感させることは、学級担任が教科指導を行うに当たって重要な責務である。生徒指導は教科指導を充実したものとして成立させるために重要な意義を持っており、教科指導を通して生徒指導の機能を生かすことは、児童生徒一人一人が生き生きと学習に取り組み、学級の中での居場所をつくることに他ならない。つまり、児童生徒一人一人に自己存在感や自己有用感を持たせるとともに、自尊感情を育て、自己実現を図ろうとする態度を養うことに通じるものである。したがって、教科指導において生徒指導の機能を生かすことは、学習集団における人間関係を調整・改善し、豊かな人間性を育むことにつながることになる。

イ　生徒指導の機能を生かした教科指導

①居場所づくり

学級には、学力や運動能力に差異が見られ、日本語が不得手な帰国子女や発達障害が見られる児童生徒の存在など、様々な意味において多様な児童生徒の存在が一般的となっている。学級担任はこれらについて正しい知識と認識を持ち、児童生徒一人一人の生活や学習における課題を把握・理解することが求められる。これらの課題を踏まえ、授業の中で児童生徒一人一人の良さや得意分野を見出すことに努め、学習に対して充実感や達成感を味わえるようにすることで、その学級において存在感を持つことができる。

②わかる授業の工夫

児童生徒一人一人が学習の目標を持って意欲的に生き生きと授業に参加し、自ら目標や課題を明確にし、自ら考え、自ら判断し、自ら行動しながら主体的に課題を解決する能力や態度を育む必要があり、そのためには、教える内容を効果的に習得させるための個に応じた指導や教材・題材の開発と作成、発問や指示の構成などの指導方法、ティーム・ティーチングなどの指導体制を継続的に工夫・改善することが求められる。

また、ICT を活用した指導方法を習得し、授業の場で活用することによって教科指導の効果をさらに高めることが必要である。

③学ぶ喜びの実感

学級の中において、様々な友達と協力し合いながら共に学び合うことの意義を体感させることで、学級やグループで協力して学ぶことの大切さを実感させることは重要である。また、一人一人に学力を身に付けさせるためには、一人で学ぶ場だけでなく、みんなで学ぶ場を設けることが教科における生徒指導のポイントとなるため、学習内容の習熟の程度に応じた学習、児童生徒の興味・関心等に応じた課題学習、補充的な学習や発展的な学習など、個に応じた指導、体験的な活動や作業的な活動を一斉学習やグループ学習の場で、学び合う機会を積極的につくることが求められる。

このことにより、児童生徒一人一人が互いの違いを認め合い、互いに支え合い、学び合う人間関係の醸成につながることになる。

④言語力を育てる

言語は、様々な人たちとコミュニケーションを図るためのものであるとともに、豊かな感性や情緒の基盤となるものである。つまり、思考を促し理解を深めるなど理論や思考など知的な活動を支え、人と人とをつなぐ重要な手段であるため、教科指導において、聞く、話す、読む、書くといった言語活動を充実させ、児童生徒一人一人に確かな言語力を身に付けさせることが、よりよい人間関係をつくり、自立的な活動や協力的な活動の原動力となる。

（２）　学級担任による道徳教育

ア　道徳教育と生徒指導

道徳教育は、「道徳の授業をはじめ各教科や外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動など教育活動全体を通じて、豊かな心を育み、人間としての生き方の自覚を促し、児童生徒の道徳的心情、

判断力、実践意欲や態度などの道徳性を育成することがねらいである。」とされている。

一方、生徒指導は、児童生徒一人一人の日常的な生活場面における具体的な道徳的実践上の問題について指導する役割を担っており、両者の性格や機能は異なっている。しかしながら、例えば、道徳教育において児童生徒の道徳性が養われれば、それはやがて児童生徒の日常生活における道徳的実践が確かなものになり、生徒指導も充実することになる。逆に、児童生徒の日常生活における生徒指導が徹底すれば、児童生徒は望ましい生活態度を身に付けることになるため、道徳性を養うという道徳教育のねらいを側面から支えることになる。

つまり、道徳教育で培われた道徳性や道徳的実践力を、生きる力として日常の生活場面に具現できるように援助することが生徒指導の働きであり、道徳教育と生徒指導とは緊密な関係にあるといえる。

イ　生徒指導の機能を生かした道徳の授業

①道徳の授業と生徒指導

道徳教育は、教育課程の中で児童生徒の道徳性を養うための一領域として設けられており、道徳の時間について学習指導要領では、「各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動における道徳教育と密接な関連を図りながら、計画的、発展的な指導によってこれを補充、深化、統合し、道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深め、学校、その他における具体的な生活場面、状況において道徳的行為を主体的に選択し、実践する意志や構えがもてるような道徳的実践力を育成すること」とされている。

このように道徳の授業の指導は計画的、発展的に毎週１時間行われるのに対して、一般的に生徒指導も年間指導計画に基づいて指導は行われものの、児童生徒一人一人の日常生活における具体的な問題に対して援助し、指導するという機能が中心であるため、偶発的な問題を指導する場面が多くなり、道徳の授業の性格からすれば、突発的、偶発的に生じた問題をその場で指導することについては、生徒指導に期待することになる。

②道徳の授業に役立つ生徒指導

生徒指導の充実が図られ、教員と児童生徒の人間関係を育てるとともに児童生徒理解を深め、自主的に判断、行動し積極的に自己を生かすことができるようになることができれば、児童生徒自らが、自分の生き方とかかわらせながら学習を進めていくなど、道徳の授業に対する望ましい学習態度が培われることになり、道徳の授業が充実することにもつながる。

③望ましい道徳の時間の雰囲気を醸成

道徳の授業の導入段階で児童生徒理解のために行った調査結果などを活用し、生徒指導上の問題を資料化して展開段階で用いたりすることによって、道徳的価値の理解や自覚に役立てることができる。また、児童生徒の人間関係を深めるとともに、一人一人の悩みや問題を解決したり、教室内の座席配置やグループ編成を弾力化するなどの工夫によって、道徳の授業を充実させることができる。

ウ　道徳の時間の生徒指導への貢献

①生徒指導を進めるための望ましい雰囲気の醸成

道徳の授業で児童生徒の悩みや心の揺れ、葛藤などを生きる課題として取り上げることによって、自己の生き方を深く考え、人間としての在り方についての自覚を深め、児童生徒の道徳的実践力が育てられ、生活上の悩みを持つ児童生徒を温かく包み、その指導効果を上げるのに役立つことになる。

②道徳の授業が生徒指導に結びつく

学習指導要領では、道徳の授業で指導する内容として、「望ましい生活習慣を身に付けるなど規律ある生活に関すること、他者に対する思いやりの心を持つこと、生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重することや、自然を愛護し人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めること、自分の将来を考え、法やきまりの意義の理解を深め、主体的に社会の形成に参画し、国際社会に生きる日本人としての自覚を身に付けるようにすること」などが示されており、そのまま生徒指導に結びつくものである。

③道徳の授業の展開に生徒指導の機会を提供

道徳の授業の学習過程において、教員と児童生徒及び児童生徒相互のコミュニケーションを通して人間的な触れ合いの機会が与えられ、児童生徒の相互理解、児童生徒の教員理解を通して信頼関係を築く機会ともなるので、道徳の授業そのものが生徒指導の場にもなると考えることができる。また、適時適切な話し方や受け止め方などの望ましい授業態度を指導することは、直接的な生徒指導を行う機会にもなる。

（3）　生徒指導の機能を生かした学級活動

ア　学級活動の特色と生徒指導

学級集団を単位とした集団活動の目標や内容は、発達の段階上の特性からの違いが見受けられるものの、集団活動を指導する教員の役割や生徒指導との関連を考える上での差異はない。そこで、生徒指導の関連について次に述べることにする。

①学級活動においては、児童生徒が自発的、自治的に自分たちの生活上の諸課題を見いだし、学級会などの話合いを通してよりよく解決し、充実した学級や学校生活の創造に取り組む活動であり、児童生徒一人一人が生活上の工夫や係活動、集会活動などに意欲的に取り組み、互いの思いや願いなどを生かし合って粘り強く合意形成を図って実現させるという過程を通して、自己実現の喜びや連帯感を与えることになる。

こうした生徒指導の機能を生かした自発的、自治的な実践活動は、学級や学校に対する所属感を抱かせる、児童生徒一人一人をよりよく集団生活に適応させることになり、自主的、実践的な態度や健全な生活態度を身に付けることにつながる。

②学級活動は、好ましい人間関係を基盤として、児童生徒が日常生活を営む上で必要な行動の仕方や望ましい在り方・生き方を追求する態度を、学級担任が計画的、発展的に指導する教育活動である。その意味で、この内容は、生徒指導の全機能を補充し、深化し、統合することを目指し、

生徒指導の一層の充実、深化を図る役割を持っている。また、これらの教育活動は、各教科、道徳、総合的な学習の時間や特別活動の内容と関連が深く、それらに教育効果を支え、高める基盤になっており、学校全体の教育機能を一層充実させ、強化する役割を担っている。生徒指導もまた、そのねらいや機能からみて、全教育活動の基盤としての役割を果たすと考えられる。

③中・高等学校においては、一層、自己の将来に夢や希望を抱き、意欲的かつ主体的に学習に取り組むとともに、将来の生き方や進路に関する体験、情報の収集や活用を図ったりしながら、自己の個性や学習の成果を生かす進路を自らの意志と責任で考え、選択していく能力を身に付けるようにすることが重要である。

また、キャリア教育の充実の観点も踏まえ、各教科や総合的な学習の時間との関連や特別活動の他の内容との関連などを押さえて作成された年間指導計画のもと、適切な指導が行われるようにする必要がある。発達の段階などの系統性を踏まえた指導計画の作成と指導の充実は、個々の生徒が将来にわたってよりよく自己実現を図って生きていく力を身に付けることを目指す生徒指導の重要な課題でもある。

④児童生徒が学級集団や学校生活によりよく適応し、自己を生かして主体的に生きていくことができるよう指導・援助するのが学級担任の役割であり、そのためには、児童生徒一人一人について理解を深めるとともに、日常の望ましい生活態度の形成をはじめとして、学業上の問題、発達上の問題などについて、その解決を援助する必要がある。特に、生活や学習などにかかる自己の問題について理解し、その解決方法を自己で決定し、努力するなどの指導は、生徒指導の機能が直接的に生かされる教育活動である。

⑤学級活動においては、生活上の諸問題の解決にあたり、例えば、学級会といった集団討議により問題解決をし、よりよい生活づくりに取り組むことになる。また、生活づくりのための学級活動において実践されることが予想される学級新聞づくりや学期末などの思い出づくり集会などに取り組む場合も、学級の全員によって役割分担が行われ、その役割や創意工夫に取り組む集団活動の過程で、他者からの承認がきっかけで自分の成長を実感し自信を得たり、普段の学習活動では見られない良さを発見したりもする。また、適応、健康安全、学業や進路等に関する学習活動においても自己理解、他者理解を深める指導が行われる。

イ　学級活動の指導の工夫と生徒指導

学級活動の特色や役割をよりよく生かすためには、授業の充実とその授業を支える様々な学校・学級での運営上の工夫が欠かせない。生徒指導との関係を踏まえた運営上の工夫として、次のことが考えられる。

①学校や地域、児童生徒の実態に応じた年間指導計画の作成・改善が重要であり、発達の段階を踏まえ、自発的、自治的活動の範囲や活動例、適応等の指導内容の学年系統を明示するなど、活用しやすい指導計画を作成し適宜に改善を図るようにする。

②授業時の話合いや活動を充実するには、事前に授業時の活動への共通理解を図り準備することが大切であり、児童生徒による運営組織が主体的に事前の活動を推進し、学級の成員一人一人が自らの思いや考えを持って意欲的に活動に参画できるようにすることである。また、始業前に

「朝の学級話合い」などの時間を設定することも考え、授業に向けた準備の話合いなどが行えるようにし、朝の会や帰りの会などとの関連も工夫することが必要となる。

③望ましい自発的、自治的な活動は、適切な教員の指導のもとで育成されるため、児童会・生徒会活動との関連や生活づくりの諸問題の発見、実践への挑戦の意義など、年度始めや学期の終わりを中心に、適宜オリエンテーションを実施することが必要である。

④学級活動の指導においては、活動内容に応じた適切な資料を活用することが児童生徒の自己指導能力を育成する鍵になる。また、学級担任が他の教員や地域の人材と連携し、授業の充実を図ることも大切である。

⑤集団活動においては、往々にして個別的な指導が疎かになるため、適宜に教育相談を充実させ、家庭や地域等との連携を図るなど児童生徒理解を進め個別指導の充実に努める必要がある。また、学級活動の授業の充実という観点のほか、他の集団活動、学校生活全体に関する教育相談も大切となる。

5．おわりに

一般の企業では、社員として採用されると商品知識や営業の在り方など、十分な研修を経て、ベテラン社員とチームを共にするなど、段階的に経験を積み一人前の社員として認められるまでには相当な時間を要する。一方、教員として採用されると、初任者研修制度や経験に応じた研修制度があるものの、いきなり教科指導、生徒指導、二年目には学級経営を担当するケースが概ね一般的である。採用以前に講師を充分に経験しているケースでは、新規採用と同時に経験豊富な教員と同じような職務を与えられても特に戸惑いもなくスムースに職務を遂行することができる。しかしながら、現場経験がなく、教育実習のみの経験しか持たない現役学生が新規採用教員として職務を遂行するには多くの点で問題が生じることがある。つまり、教科指導では自己の学修歴や専門性を生かすことができるものの生徒指導や学級経営になると、様々な経験や見識を身に付けておくことが求められ、特に問題行動児童生徒や保護者への対応などは、児童生徒の個性や家庭環境、問題行動事案によって、それぞれ適切な対応が求められるケースが一般的であるため、経験と研修が必要となり時間も要する。つまり、教員も医師のようにインターン制度の導入が必要な時代になっているのではないかと考えられ、講師経験がまさにそれに当たるものである。現在、文部科学省では教職大学院を設置するなど、教員としての資質能力が高められるよう教職課程の充実に努めているが、教員は現場で経験を積むことが最も重要であり、特に現役学生に対する研修の充実が求められる。したがって、現役学生で採用された教員にとって本論で述べたことを実践で直ちに活用できるまでには時間がかかると思われるが、学級担任を受け持つことになった場合に一つの参考資料として活用していただければと思う。

また、経験豊富な教員にあっても、生徒指導の機能を生かした学級経営を行っているかを検証する一つの材料として活用していただくことを願うものである。

参考文献及び統計資料

1) 「思いやりをはぐくむ学級経営の工夫」　群馬県教育センター研究紀要（2005 年 2 月）
太田市南小学校　特別研修員　岡田澄恵著（研究論文）
2) 「学級経営力」　今泉博、佐藤隆、山崎隆夫、渡辺克哉、他著（2004 年 12 月）　旬報社
3) 「学級経営に関する考察」－学級集団づくりを通して－
和歌山県教育委員会（2014 年 4 月）　指導の手引き
4) 「学級経営の充実に向けて」　福岡市教育センター（2011 年 4 月）指導の手引き
5) 「必ず成功する学級開き魔法の 90 日間システム」堀裕嗣著（2012 年）明治図書
6) 「これだけは知っておきたい道徳授業の基礎・基本」渡邊弘著（2012 年 4 月）川島書店
7) 「高等学校学習指導要領解説」特別活動編　文部科学省（平成 21 年 12 月）
8) 「生徒指導提要」文部科学省（平成 23 年 3 月）
9) 「中学校学習指導要領」特別活動編　文部科学省（平成 20 年 9 月）